17. 山梨県の某学童の蛲虫について

大 田 秀 浄

緒　　言

全国的にぎよう虫、鉤虫保有者は逐年低下してきたが、ぎよう虫保有者については検査方法も徹底せず、且つ駆除についても関心が余りもたれていない。昭和32年度の山梨県の主に塗沫法によるぎよう虫卵検出率は0.1%、全国平均0.3%であるが、ぎよう虫の生態からみて、ぎよう虫卵の検出には塗沫法では不可能であり、肛門周囲の虫卵検査によらなければ、その寄生率を知ることが出来ないことは既知の事実である。1957年林らはセロフアンテープ法による検肛により、長野県飯田市の一般住民26名中83名（31.2%）、幼稚園児169名中83名(49.2%)、幼稚園児の家庭では612名中331名（54、2%）の高率を示したと報告している。赤木は幼稚園児の検肛により、第1日61名(37.7%)、連続3日間で35名(57.4%)、5日間で41名(67.3%)、37日後100%、又他の幼稚園児にて第1回99名中70名(70.4%) 連日3日間で89名（82.8%）5日間85名(85.9%)にぎよう虫を検出し、ぎよう虫の寄生率あるいは検肛による診断は必ず検査日数を必要とし、一般に連日3日間、あるいは5日間検肛で可であろうと報告している。ぎよう虫は小児において特に自覚症状を訴えるので、今後他の寄生虫の低下に伴い、ぎよう虫対策も実施すべきであると考える。余は山梨県において少数例ではあるが検肛を実施し、その成績を得たので報告し、ぎよう虫に対する再認識と検肛、駆虫の実施の啓蒙としたい。

実　験　方　法

甲府市北部の農村に近き某小学校学童をウスイ式ぎよう虫検査用セロハンにより、学校において検肛を3日間連続して検査し、陽性者にピペラジン「中薬」（1錠中燐酸ピペラジン208mg、ピペラジンハイドレート200mg相当量含有）、及びピペラジンシロツプ「中薬」（1cc中クエン酸ピペラジン132mg、ピペラジンハイドレート100mg相当量含有）を空腹時に5日間連用せしめた。

実 験 成 績

2年生の1クラス62名を1953年10月に3日間連用検肛しぎよう虫卵陽性者は27名（43.5%）あり、これらの学童は蛔虫を対象に毎月検便をなし、6年卒業まで実施し、蛔虫駆虫剤を投与したモデルクラスであるが、同クラスの6年生の時、（1957年）63名を3日間検肛し、陽性者は20名(31.8%)であつた。これらは全くぎよう虫駆虫剤を服薬させたことはなかつたが、これらの20名にピペラジン錠を12錠宛午前10時頃、5日間連用せしめ、服薬終了後2週間に更に検肛をなし、陽性者は4名(6.4%)であつた。（1表参照）しかし服薬陰転しない者は1名にて、他の3名は新らたに虫卵が発見された。

1 表　学童6年生の検肛及び駆虫後の成績

駆虫前	検肛回数	被検者	陽性者	駆虫後	被検者	陽性者
	1	63	3		63	2
	2	63	9		63	1
	3	63	8		63	1
	累計	63	20(31.8%)		63	4(6.4%)

同小学校学童の1年生37名を1958年7月に、1回目3日間検肛をなし、23名（62.2%）の保有者を認め、これらの陽性者にピペラジンシロツプを15cc宛午前10時頃5日間連用せしめ、駆虫後68日目に更に検肛し、陽性者6名（16.2%）であつた。しかし服薬陰転しない者は2名にて、他の4名は新らたに虫卵が発見された。これらの陽性者に前回と同様服薬せしめ、駆虫後45日目に、更に検肛をなし、陽性者7名（18.9%）であつた。しかし服薬陰転しない者は3名にて、他の2名は新らたに虫卵が発見された。再びこれらの陽性者に前回と同様服薬せしめ駆虫後2週間に更に肛検をなし、陽性者10名（27.0%）であつた。しかし服薬陰転しない者は1名もなく、10名は新らたに虫卵が発見された。これら37名の12回の検肛によるぎよう虫卵陽性者の累計は31名（83.8%）であつた。（2表参照）

2 表　学童1年生の12回検肛成績

検肛回数＼月	陽性被検者	1回（7月）陽性者	2回（9月）陽性者	3回(11月)陽性者	4回(12月)陽性者
1	37	13	3	5	6
2	37	6	2	0	4
3	37	4	1	2	0
累　計	37	23(62.2%)	6(16.2%)	7(18.9%)	10(27.0%)
新感染累計		23(62.2%)	27(73.0%)	29(78.4%)	31(83.8%)

総 括 及 び 考 按

学童の低学年の3日間連続検肛により、62名中27名（43.5%）、及び87名中23名（62.2%）のぎよう虫寄生率であつたが、赤木の実験によつても3日間の検肛でぎよ

う虫の生態からみて不十分である。余の実験によつても陽性者のみに服薬検肛し、6カ月間に12回の検肛を累計すると陽性者は37名中31名（83.8%）の高率を示した。1年間を観察すれば、全員ぎよう虫を保有していることになると考える。しかし検肛には費用と手数を要するので日数をかけて検肛するのはもちろん、全学童を再三実施することは困難であるので、3日間連続検肛実施が実用的であると考える。

又ぎよう虫駆除にはピペラジン製剤が効果があることは多数の報告があるが、余が高学年にピペラジン錠「中薬」12錠宛、5日間連用、低学年にピペラジンシロツプ「中薬」15cc宛5日間運用せしめた成績は、前者の陰転者は20名中19名（95.0%）、後者は23名中21名（91.3%）、6名中4名（66.7%）、10名中10名（100%）であつた。ピペラジンシロツプ服薬後68日、45日の検肛の91.3%、66.7%の陰転率は服薬後の検肛期間が長過ぎた為、再感染もあつたと考える。全員に服薬しないとぎよう虫の場合は感染機会に恵まれているので保有者のみに服薬させたのではぎよう虫寄生率の低下はみられない。同時に保有者の家族の駆虫を実施しなければならぬことはもちろんである。しかし今日のこれらのぎよう虫駆除剤は高価であるのでその様なことは不可能ではないかと考えられるので、余の実験によつても保有者のみに駆虫剤を与えた。これらの駆虫薬による特記すべき副作用は認められなかつた。

結　　語

1、余の実験による山梨県某小学校学童のぎよう虫寄生者は3日間連続検肛により、低学年37名中23名（62.2%）高学年62名中20名（31.8%）であつた。

2、低学年37名を6カ月間に12回検肛によりぎよう虫寄生者の累計は37名中31名（83.8%）の高率を示した。

3、ピペラジン製剤による駆虫効果は服薬後2週間の虫肛にて95%～100%の陰転率を得た。

主要参考文献

1）赤木勝雄（1952）：ぎよう虫について、日本医事新報，1506，3—5.

2）林滋生、他（1958）：ぎよう虫の疫学的研究、特に長野県飯田市における一般住民の調査を中心に生活行動とぎよう虫感染の関連についての解析、寄生虫学雑誌，7(6)，269.